



TITLE:

(随想)大連医院泌尿器科の思い出

AUTHOR(S):

柳原, 英

CITATION:

柳原, 英. (随想)大連医院泌尿器科の思い出. 泌尿器科紀要 1959, 5(10): 989-990

ISSUE DATE:

1959-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111846>

RIGHT:

泌 尿 器 科 紀 要

第 5 卷 第 10 号

昭和34年10月

随 想

大連医院泌尿器科の思い出

元京都大学・広島大学教授 柳 原 英

私が23年間（大正9年8月—昭和18年3月）勤務した大連医院が今は日本の手を離れて再び復元せなくなつたことは残念でたまらない。せめて其一端なりと述べて慰めとしたいと思う。私が赴任した当時の大連医院は旧ロシアの軍病院即ち日露戦争終了後の日本陸軍病院を踏襲したので建築物は各科、各病棟共孤立してお互いに連絡のない不便なものであつた。例えば皮膚科、泌尿器科外来と其病棟とが離れて居る。内科も外科も別棟であるばかりか、X線科も別棟でそれに通ずる廊下もない。此形式は北満のロシア軍病院を御覧になつた方は御承知のことと思う。明治40年4月、時の陸軍病院を満鉄が継承して満鉄大連病院と命名し満州各地に分院或は出張所を設けて大連病院がこれを統轄し、満鉄社員及其家族の診療を開始したのである。其際陸軍三等軍医正秋山春斎氏が院長となり、其旗下に3—4名の一、二等軍医が配属せられ、内科、小児科、外科は勿論、皮膚科、泌尿器科も設けられたとあるから吾が泌尿器科は大連病院の創設と共に設けられたことは事実である。これも当時戦役の余波未だ醒めず且役伐の気風漲り満州否大連も発展の途上にありて、沸くが如き人気のあつたためか、花柳病の蔓延甚だしく所謂皮膚科、泌尿器科の必要性に逼られたものならん。その使命は花柳病の治療が主であつたことは申す迄もない。然して初代皮膚科、泌尿器科医長は陸軍々医大和良作氏であつた。同年10月関東都府府勤務中の塙繁弥太氏が招かれて二代医長に就任せられたのである。明治43年塙氏は2ヶ年間独逸及瑞西国に留学を命ぜられたので、当時の外科医長尾見薫博士が皮膚科医長を兼務された。塙氏帰朝せらるるや、大正元年9月奉天南満医学堂教授兼務となり、その附属病院奉天満鉄医院皮膚科、泌尿器科開設に尽力せられた。然るに大正6年に至り奉天医院の皮膚科も完備し南満医学堂教授兼奉天医院皮膚科医長に太田正雄氏（前東大教授）が就任せらるるや塙医長は再び大連医院皮膚科医長専務となられた。大正9年6月塙医長辞任して東京市内に開業せらるるや、不肖柳原英が同9年8月10日着連、乏しきを医長に就任した。当時大連医院には泌尿器科の施設不充分であつたので当時の院長尾見薫氏の了解を得て膀胱鏡其他泌尿器科に必要な諸設備を整備して泌尿器疾患の診療に従事した。かくて大連医院も皮膚科、花柳病科並びに泌尿器科の実質を備うるに至つたのである。当時吾が科は私を加えて7名によつて診療に従事するの盛況を呈するに至つた。大正12年吾が泌尿器科ではX線による腎盂腎盞造影法を開始した。現在での腎盂造影法は普通診断法の一つになつておるが当時の吾が国では殆んど臨床応用の域に達せず、東大、京大、九大でも実施されて居なかつた。私は大正13年3月末の新潟に於ける日本皮膚科学会に其貧弱なる成績を発表したのに

世の反響を引いたと見えて、名古屋大学の田村春吉教授はX線技師を同道して大連医院に迄歩を運ばれたことを思い出す。当時吾が国では腎盂撮影法なるものが如何に珍らしかつたかが推察される。当時大連医院ではブツキー ブレンデもなく、今から見れば実に貧弱極まる腎盂像で人様に示される様なものではなかつたのである。

然るに私は大正14年に欧米に出張して各地を見学するに所謂腎盂撮影法が現在の吾が国の様に至極簡単に実施されておるのに驚いた。ブツキー ブレンデが使用されて居つたのは勿論である。更に私は大正12年男子尿道のX線撮影をも開始し大正13年大連に開催された満州医学会総会に発表した。時を同じうして Moscow の Dr. Frumkin は1925年(大正14年)に男子尿道のX線撮影を発表した。然し Dr. Cunningham は1910年に同様の撮影を発表しておつたのである。私の欧米出張中(大正13年10月—大正15年3月)は日高誠一博士が代理として着任せられ、辞任後、帰国して大阪市に開業せられた。私は欧米より帰朝するや予ねて新築に着手して居た大連医院も落成し、移転を完了した。抑も大連医院は初代満鉄総裁後藤新平子爵によつて創案されたものが(1907)約20年後の大正15年に完成された大病院で床数約800、冷暖房設備は勿論、ドクター及ナース コーリング等諸装置の完備せる名実共に東洋一を誇る大病院が出来上つたのであるが落成後20年の敗戦と共に満鉄否日本の手を離れたのである。更らに私は帰朝後 Belfield and Rolnick に倣い精管並びに精嚢腔のX線撮影を開始した。爾来京大から広大に至る30有余年間精嚢の研究を続けて来たが何分にも愚鈍の上に大東亜戦争に禍いされて見るべき成果を得なかつたことは返えす返えすも残念に思つておる。幸にも大連医院、京都大学、広島大学、岡山大学、大阪医大等に於ける共同研究者其他によつて、此方面の研究が続行されつつあることは何よりのことと喜んでおる。かくて私の在職中大連医院に於てもブツキー ブレンデ附膀胱鏡検査台を購入することは出来たのであるが、X線科の中央式に悩まされて、それを泌尿器科外来に装置することが出来ず中央X線室に放置したまま内地に引揚げなければならなくなつたのである。これがたまたま残念であつたのと、京大に帰つて来て外来に装置されたX線撮影用膀胱鏡検査台に非常な便利を感じたことにより広大到就任するやこのことだけはと懇望して、狭い広大病院泌尿器科しかも広大としては中央X線式を取つておるにも係らず、泌尿器科のみはX線装置を外来に設置することが出来たのは大連病院での苦い経験の賜であつた。現に其後広大が呉市より広島市に移転しても泌尿器科外来内に特別にX線装置を設けて附属病院の中央X線方式から切り離してあるのである。本誌第5巻第7号に大阪日赤の正木平蔵君が泌尿器科内にX線装置を設けんと試みられても中央X線方式に妨げられてなかなか実施の運びに行かないと苦慮しておられるのは残念なことである。元来泌尿器科に於けるX線装置は内科に於ける聴心器或は心電装置、眼科に於ける検眼鏡にも比敵せらるべきもので、泌尿器科疾患の多くのものに必要があるばかりでなく此装置が泌尿器科内にないために患者に与うる苦痛の甚大さを考へるとき泌尿器科と此装置とは決して切り離して考えられないものである。たとえ病院としては中央X線方式を取らるるにしても、泌尿器科だけでは特別に此装置を設置して貰うことを病院を経営せらるる方々をお願いしたい。然して他方これによつて泌尿器科が一段と進歩発達する所以でもあるのである。而して私が大連医院を去つた後は副院長松見一男君が院長に昇任せられ終戦を迎えられたのである。かくて吾が大連医院泌尿器科は明治40年4月に始まり、昭和20年8月に終つたのである。

腎盂及び尿道撮影法に関する文献：東洋医学雑誌(大正13年5月)、満州医学雑誌(3巻1号、5巻5号、6巻1～2号、6巻4号)